

令和7年度病虫害発生予察情報 発生予報第2号

令和7年4月30日

発表：福島県病虫害防除所

1 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲 (育苗期)	苗立枯病 (ピシウム属菌、フザリウム属菌等による立枯病)	全 域	—	平年並	天候予報(4月24日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(+)。 近年の発生は少なく推移している(—)。	急激な温度変化や、過湿・乾燥の繰り返しは発生を助長するため、適切な温度管理を行う。 育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	もみ枯細菌病	全 域	—	平年並	種子更新率は平年並である(±)。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されている(+)。	育苗期間中は28℃以下の温度管理を徹底する。 育苗器内の温度は、付属センサーだけではなく温度計を併用し、育苗ムラに注意する。
	苗立枯細菌病	全 域	—	平年並	近年の発生は少なく推移している(—)。	育苗期間中の気温の変動が大きいと予想されるため、育苗ハウスの温度に注意し開閉等を行う。
	イネミズゾウムシ	全 域	平年並	平年並	天候予報(4月24日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、有効積算温度によるシミュレーションの結果、水田侵入盛期は平年並と予想される(±)。	水田侵入盛期が移植時期と重なる場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。
	イネドロオイムシ	全 域	平年並	平年並	天候予報(4月24日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年より高いと予想されており、有効積算温度によるシミュレーションの結果、水田侵入盛期は平年並と予想される(±)。	幼虫期に低温が続く場合は、被害が大きくなりやすいので注意する。 高密度は種の場合は、箱処理剤の施用量に注意する。 チアメトキサム剤に対する感受性低下が確認されているため、効力低下が認められる場合には、薬剤を変更する。
麦類	赤かび病	全 域	平年並	平年並	天候予報によると、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている(±)。	防除時期や薬剤等については、令和7年4月15日付け防除対策を参照する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

- 現在の果樹の生育は、平年より2～6日早まっています（4月24日付け果樹情報）。
- 各種害虫のフェロモントラップ調査(4月21日時点)の結果、誘殺時期は平年並ですが、1か月予報（4月24日付け仙台管区気象台発表）によると、向こう1か月の平均気温は高い確率50%であり、**今後、発生時期が早まること**が想定されます。
- 4月中旬に複数回の降雨があり、**各種病原菌の胞子の飛散や病斑の発生が確認されています。**
- 今後の気象情報に留意し、生育に応じた計画的な防除を実施しましょう。**また、耕種的防除を徹底し、発生密度の低減を図りましょう。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	リンゴハダニ	全域	—	やや少ない	令和6年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は平年よりやや少なかった（－）。	ハダニ類の発生状況を観察し、要防除水準（1葉当たり雌成虫1頭以上）に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類（越冬世代）	全域	—	平年並	前年10月の果実被害は平年並であった（±）。	前年に発生が多かった園や、現在、花や新梢に食害が見られる園では、落花直後の防除を徹底する。 複合交信かく乱剤を使用する園では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	平年並	4月中旬の県北地域の巡回調査（品種「あかつき」）において春型枝病斑の発生は確認されなかった（－）が、参考調査の「ゆうぞら」ほ場で春型枝病斑の発生が確認されている（＋）。	春型枝病斑は見つけしだい、せん除して適切に処分する。 薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する（令和7年4月〇日付令和7年度病害虫防除情報「モモせん孔細菌病」参照）。
	モモハモグリガ	中通り	—	やや多い	令和6年12月に越冬成虫が確認された発生地点割合は平年よりやや高く、越冬成虫のフェロモントラップへの誘殺数が例年より多かった（＋、別紙1）。	ミツバチ等を導入している園地では、巣箱回収後に速やかに防除を実施し、発生密度を抑えたうえで、複合交信かく乱剤を設置する。
	ハマキムシ類（越冬世代）	中通り	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花らい被害の発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	複合交信かく乱剤を使用する園地では越冬世代成虫発生初期までに設置する。
ナシ	黒星病	県北 県中・ 県南 浜通り	— — —	平年並 平年並 やや多い	4月中旬の芽基部病斑の発生ほ場割合は、県北・県中・県南で平年並（±）、浜通りでやや高かった（－）。特に、いわきでの発生ほ場割合が高かったため、注意が必要である。	りん片が付着したままの花そうは、芽基部病斑の可能性が高いので、見つけしだい除去し、適切に処分する。 降雨の度に子のう胞子の飛散が確認されている（果樹研究所）。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。

ナ シ	ハダニ類 (リンゴハダニ、クワオオハダニ)	中通り 浜通り	—	平年並 やや少ない	令和6年12月実施の越冬量調査において、越冬卵が確認されたほ場の割合は、中通りで平年並(±)、浜通りでやや少なかった(－)。	ハダニ類の発生状況を観察し、要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達したら殺ダニ剤を散布する。
	ハマキムシ類(越冬世代)	全域	—	平年並	4月中旬の越冬世代幼虫による花そう被害の発生ほ場割合は、平年並であった(±)。	前年に発生が多かった園や、現在、新梢に食害が見られる園では落花1週間後の防除を実施する。 複合交信かく乱剤を使用する園では越冬世代成虫発生初期までに設置する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ	■腐らん病 <u>ほ場での発生状況をよく観察し、枝や主幹などの発病部位は、徹底して除去しましょう。</u>枝腐らんは健全部5cm以上含めてせん除し、胴腐らんは周囲の健全部5cmまで広く削り取ってください。切り口には必ず殺菌塗布剤を塗布し、感染を防止し、除去した発病部位は伝染源となるおそれがあるので、園外に持ち出し適切に処分しましょう。 「ふじ」は摘果が遅れると果柄が脱落しにくくなり、本病に感染しやすくなるので早期に摘果を実施しましょう。 ■黒星病 4月4日以降、降雨の度に子のう胞子の飛散が確認されています(会津地域研究所)。<u>本病の重要防除時期は、展葉期から落花20日後頃であり</u>、落花直後に効果の高いDMI剤を散布して感染を抑えましょう(県病害虫防除指針参照)。 <u>青森県をはじめ他のリンゴ主産県で本病の重要防除剤であるDMI剤の耐性菌の存在が確認されています。</u>本剤耐性菌がまん延すると防除薬剤の効果が低減するおそれがあるので、DMI剤の使用回数に留意しましょう。また、他県からリンゴ苗木・穂木等を導入する際は十分注意しましょう(「注意喚起 他県でのリンゴ黒星病におけるDMI剤耐性菌の発生について」(https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/apple-dmi.html))。 ■褐斑病 本病原菌は主に罹病落葉で越冬し、翌年の開花期～6月頃に子のう胞子を飛散し、葉に一次感染します。本年は、4月23日に子のう胞子の初飛散が確認されました(果樹研究所)。<u>本病は、初発が早いと多発する傾向にありますので、一次感染期からの防除の徹底が重要となります。</u> 例年発生がみられるほ場では、落花直後および落花2週間後にデランフロアブル 1,000倍、落花30日後にアントラコール顆粒水和剤 500倍を散布して初期の感染を抑えましょう(県病害虫防除指針参照)。
モ モ	■シロカイガラムシ類(ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ) ウメシロカイガラムシ第1世代のふ化開始は、今後の気温が2℃高く推移した場合、5月1半旬頃と予測され、防除適期は5月2半旬頃と推定されます(果樹研究所)。クワシロカイガラムシの防除適期はウメシロカイガラムシより5～10日程度遅く、防除適期が異なりますが、令和5年度「参考となる成果」により、両種を同時防除できる殺虫剤が明らかとなりました(http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/624632.pdf)。 <u>カイガラムシ類はふ化定着初期の防除が重要であるため、防除適期を逃さないように防除を徹底しましょう。</u>

ブドウ	■晩腐病、黒とう病 前年の房の取り残し部分、巻きひげ、結果母枝の枯死部などを丁寧に除去し、越冬病原菌密度の低下を図ってください。なお、巻きひげ除去には専用器具を使用すると効率的に作業ができます（令和５年度「参考となる成果」https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/624637.pdf）。
果樹共通	■カメムシ類 令和６年の多発を受け、本年は４月１日からフェロモントラップ調査を開始しました。４月２１日現在、クサギカメムシの誘殺が確認されており、福島市（飯坂町）では、例年の４月下旬よりも誘殺が多くなっています（別紙２）。昨年の１０～１１月に実施したクサギカメムシの越冬量調査において、県北地方の福島市（大笹生）では平年より少なかったが、桑折町は平年より多かったため、引き続き、今春の越冬世代の発生には注意しましょう。また、いわき市では平年並の状況でしたが、会津若松市でも平年より多かったため、今春の越冬世代の発生には注意しましょう。 チャバネアオカメムシは、福島市、国見町、鏡石町で１～２頭誘殺されている状況です。 ツヤアオカメムシについては、いずれの地点でも誘殺は確認されていません。 越冬世代成虫による加害は幼果期から始まる場合があるので、特に山沿いの園地ではカメムシ類の飛来状況をよく観察し、多数の飛来が見られる場合は速やかに防除を行いましょう。 なお、多発した昨年は、春期の気温によって、４月下旬以降に誘殺数が増加しました。向こう１か月の平均気温は高い確率５０%であるため、引き続き、フェロモントラップ調査等を参考にして、発生動向に注意しましょう。

３ 野菜・花き

○注意が必要な病害虫

トマト	■トマトキバガ ３月下旬から周年栽培のハウス内で葉の食害が確認されています。今後の作型での発生も注意が必要です。
-----	--



病害虫防除所
の HP はこちら
から